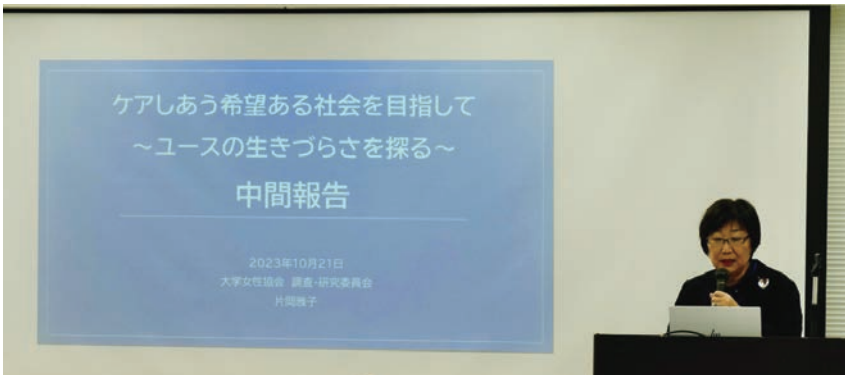
すべての女性が輝く明日のために

JAUW会報

第280号
2023年11月

一般社団法人
大学女性協会

JAPANESE ASSOCIATION OF UNIVERSITY WOMEN



特集　全国セミナー

企画委員長より、プログラム…… 2

基調講演要約、分科会報告…… 3

調査・研究委員会報告…… 4
社会福祉委員会報告

J カフェ〈ゲスト編〉・第15回報告 …… 5
スイスヨーデルの風コンサート報告

ヒューマン・ストーリー第８回…… 6
鷲見八重子元会長

支部だより…… 7
仙台支部、大阪支部

役員候補者推薦のお願い…… 8
パトリシア募金寄付者ご芳名、
JAUW 新春のつどい、
国際奨学委員会からの報告、
理事会から、新入会員

2023年度　JAUW 全国セミナー

教育・ジェンダー・共生

―ユースの力を日本の未来に活かすために―

日時：2023年10月21日（土）11：00 ~ 16：30　　22日（日）9：30 ~ 11：40

会場：エッサム神田ホール1号館　大会議室301号・オンライン併用

全国セミナーをイベントだけに終わらせないために

企画委員長　**中道　貞子**

2023年度全国セミナーは、4年ぶりに分科会も含めて実施することができ、1日半の日程での開催となりました。基調講演は、「生きづらさに立ち向かう」と題して、日々ユースに接し、様々な場で広く活躍されている上智大学教授　三浦まり先生にお願いしました。三浦先生ならではの視点から、日本のジェンダー問題の現状や課題、それを乗り越えるための方策などについて示唆に富む講演をいただき大変好評でした。

昨年度シンポジウムのサブテーマ「ユースの視点から見直そう　これからの日本」に引き続き、今年度セミナーのサブテーマは「ユースの力を日本の未来に活かすために」としました。ユースの声を直接お聞きするため、大学女性協会の活動でご縁を得た方々に登壇いただきました。国際会議参加支援制度でCSW67に参加された学生2名と、2019年度及び2022年度の国内奨学金受賞者3名の発表は、ユースのエネルギーと今後の活躍の可能性を強く感じるものでした。彼女たちの思いを受けとめ、ユースが活躍できる未来のために、私たちに何ができるのかを考えていかなくてはという思いを強くしました。

ユースの5名以外の登壇者は会員の皆さまでした。全体会報告者、分科会パネリストやファシリテーターとして、岡山、茨城、神戸、東京、静岡、奈良、熊本の各支部会員に登壇していただきました。会員の持つ力を再認識するとともに、私たちは、このセミナーで学んだこと、議論したこと、考えたことなどを一過性のものとしてはならないと思います。その一つの方法として、ウェブサイトの活用があるのではないでしょうか。例えば、「私たちの活動」の中にある「啓発・提言」には「より良い社会を作りたい」という願いを実現するために、「セミナー・シンポジウム」「調査・研究」「私たちの声」のページがあります。また、委員会活動や支部活動のページもあります。会員一人ひとりが大学女性協会の多彩な活動を知り、互いの繋がりを強め、それぞれの取り組みを継続し、発展させてくださることを願っています。

最後に、企画委員や実行委員はじめ、ご参加の皆さまのご理解とご協力に改めて感謝申し上げます。

プ　ロ　グ　ラ　ム

第一日			
開　　会	11：00～	**開会の辞**	総合司会：鷲崎千春 副実行委員長
		会長挨拶　岩村道子	進行役：中道貞子 企画委員長
		ビデオメッセージ	岡田恵子 内閣府男女共同参画局 局長
基調講演	11：10～	「生きづらさに立ち向かう」	三浦まり 上智大学法学部教授（東京支部）
全体会Ⅰ	13：30～	・CSW67に参加して	小林萌菜、嶋田梨子（国際基督教大学）
		・「生きづらさ」アンケート調査中間報告	片岡雅子（調査・研究委員長）
		・「世代間交流の取組み～みんなで子育て・鎧を脱いで～」	中島美那子（茨城支部）
分　科　会	15：00～	1. 教育「キャリア構築を目指して」	伊津野舞佳（慶應義塾大学大学院）、紀本夏実（株式会社ジョブ）
		2. ジェンダー「改めて問う　女性の政治参画に今、必要なものは何か」	伊藤舞（神戸支部）、日向美砂子（東京支部）
		3. 共生「誰もが生きやすい社会を目指して」	濱松若葉（津田塾大学大学院）、遠藤理枝（社会福祉委員長）
懇　親　会	17：30		
第二日			
全体会Ⅱ	9：30～	分科会報告とディスカッション	
閉　　会	11：30～	**閉会の辞**	鷲崎千春

＊報告書は例年通り年度内に作成します。会員外の方には実費と送料負担でお頒けしますので、事務所までお問い合わせください

基調講演（要約）

上智大学教授・東京支部　三浦　まり

生きづらさに立ち向かう

頂戴した「生きづらさに立ち向かう」はなかなか重いテーマです。しかしユースの力を日本の未来に活かすため、彼女たちが抱える問題を全世代で共有し、日本社会としてまた大学女性協会として、どう支援ができるかを考える出発点となるお話ができたら、と思っています。問題のない人生はなく、各人「生きづらさ」はある、だから自己責任で解決を、とはせず、その共通点の根を探し、皆で解決していこう―そういう力が湧くきっかけにしたい、と思います。

事前に拝見したアンケートからも、「女だから」という縛り、世代による価値観の違い、声の強さの差、バッシング、そうした現実が今の心優しい若い人を萎縮させ、モヤモヤ感を抱かせていることが伺えます。そうしたモヤモヤ感に女性運動は言葉を与えてきた歴史があります。言葉にして初めて、問題として共有され、社会で解決を求める方へ向かう。大学女性協会の活動もそうですが、手応えや成功体験を伝え、かつ若い人の今の時代なりの解決方法を見守っていく、そういう関係性が作れたらいいと思います。

男性ばかり居並ぶ内閣改造後の記念写真、GGGI125位、政治経済状況は変わらず、女性が輝くというかけ声はあっても強制力ある措置はされない―男性中心の決め方を変えないといけません。『さらば、男性政治』という本を私は、男性にも読んでもらいたいと書きました。女性リーダーを増やすことは決して目標ではなく、通過点だと思っています。何のために女性リーダーを増やし、増やした後、どんな社会を作りたいか、そのビジョンが必ずしも明確ではないから、施策がうまく回らないのではないでしょうか。

世界銀行は、女性が自立するために必要な雇用差別禁止、セクハラ禁止等の法律をリストにまとめています。アジア各国で対応する国内法の有無を比較した表を見ると、日本は明らかに立ち後れています。この20年でアジアを含めて世界が変わってきていることを認識しなければなりません。人権基準を引き上げることは政治でしか解決できず、逆に政治が動けばすぐに解決できます。そこで私たちは政治に関わり、政治にもっと女性を送り込む必要があるのです。

すると、女性がリーダーになりたがらない、という声が男性からあがります。しかしこれは一人一人の女性の意欲が維持できない今の男性組織のあり方、男性仕様の不文律のせいです。女性リーダーが少しでも失敗すると、いきなりその個人でなく女性だからと非難され、女性自身それがわかっているから失敗できないと身構えるため、能力を発揮しにくい～ステレオタイプ脅威～に晒されています。

日本のリーダー観は本当に早く変化しています。90年代半ばには日本人の43％は政治リーダーは男性と思っていましたが、近年では29歳以下の女性は6％しかそう思っていない。この数値は今のスウェーデンと一緒です。ところが見せられる記念写真はあの通りの落差。これを変えていくのが私たちの使命だと思います。

2018年に政治分野における男女共同参画を推進する、候補者男女均等法が出来、これまでもパート労働法、育児介護法、DV 防止法、リベンジポルノ防止法、優生保護法の改悪阻止等、女性市民の声と女性議員、女性官僚の努力で法律が整ってきました。女性政治家に必要な3条件は信念、ポジション＝権限、そしてネットワーク。現場の女性と繋がり、女性の声を拾ってこそ、初めて意味ある政策を打ち立てられます。不同意性行為を犯罪とした刑法改正等、規定が変わったのは被害者の運動の大きな成果です。現場で生きづらさを感じた当事者が声を上げたからこそ、メディアが気づきました。

「個人的なことは政治的である」は、第二波フェミニズムの重要なメッセージでした。生きづらさは個人的ですが、同じように困っている人が世の中にいます。自分だけで解決するのは大変で、孤独に陥ってしまうけれど、皆で共有していけば解決プロセスさえ楽しくなり、解決は早まり、より多くの人が救われていくと思います。私たちはもっと声を上げていきましょう。声を聞いたら、聞いた責任を引き受けて動きましょう。社会の連携が深まっていけば、生きづらさが解消できると思っています。

分科会報告

分科会1《教育》ファシリテーター：安田恵子

若手社会人として活躍中の伊津野舞佳さん、紀本夏実さんから、大学における医師／研究者、企業における研究者としてのこれまでのキャリア構築について発表がありました。メンター制度、ロールモデル、スキルの磨き方の視点から意見交換を行い、ロールモデルについては会場からも経験や意見が語られ、キャリア構築に重要な要素と考えられました。最後に、スキルを磨くための学びとして、大学における取組が紹介されました。参加者は21名。

分科会2《ジェンダー》ファシリテーター：山下いづみ

パネリストの前芦屋市長の伊藤舞さん、元小平市議会議員の日向美砂子さんから、それぞれ政治に関心を持つきっかけと政治の道へ進む決意や、政治の道へ進んで喜ばしかったこと、そして、政治の道へ進んで大変だったことを話していただきました。その後のディスカッションでは、選挙のあり方など意見が多く出され、「主権者教育」「学校教育」「座談会」「議会報告会」「SNS」「自己アピール」の必要性が語られました。参加者は17名。

分科会3《共生》ファシリテーター：勝又幸子

濱松若葉さんからは障害者就労支援の課題と沖縄ワーカーズホームの報告が、遠藤理枝さんからはJAUW社会福祉委員会の大学における障害学生支援調査結果の報告がありました。2016年障害者差別解消法施行後の日本社会の変化を認識しながらも、障害者差別をなくすために、障害者との対話から合理的配慮が実施される必要があることや義務教育段階からインクルーシブな教育環境の整備が必要であることなど意見がでました。参加者は20名。

調査・研究委員会報告「ユースの生きづらさを探る」について

調査・研究委員長　**片岡雅子**

気候変動、紛争、経済危機など世界規模の不安が覆う時代ですが、世界中が「誰も取り残さない持続可能な社会づくり」に向かおうとしています。多くの人が生きづらさを感じる中で、ユースは3年を超えるコロナ禍を経験し、さらなる生きづらさを感じたのではないでしょうか。私たちは、これまで教育をはじめ、ユースを取り巻く諸問題に関心を持ってきました。ユースの皆さんの視点を積極的に学び、誰もが生きやすい希望ある社会を共に実現していきたいと願っています。ユースの声を聴くために、2022年度から準備を始めました。

テーマ「ケアしあう希望ある社会をめざして
～ユースの生きづらさを探る～」

目的○現在のユースが抱えるさまざまな問題を把握する
○問題の背景にある社会的障壁を認識する
○社会的障壁の除去や解決方法を検討する
○どのように助け合うことができるかを追究し、提言に繋げる

調査方法○アンケートとインタビュー

調査対象○大学院生、大学生、短大生、専門学校生

2023年度5月～9月にかけて全国の支部に協力を呼びかけ、ユースへのアンケートとインタビュー調査を行いました。10支部のご協力を得て、アンケート291名、インタビューは12名から回答を得ました。

アンケートは、コロナ禍で受けた影響、社会活動への関わりなど10項目の質問を考えました。インタビューは6項目。現在の状況と問題、行政・企業・大学に求めること、そして、大学女性協会に望むことなどを対面とオンラインで行いました。インタビューでは、学生は困難な中でも学問への愛情を持って、目標に向けてひたむきに行動していることを知ることができました。そういった健気で逞しい学生からの要望を大学女性協会として真摯に受け止め、共に行動していきたいと強く思いました。

ユースとのインタビュー風景

アンケートのまとめと考察については、今年度末を目標に、取り組んでいきます。

皆さまのご協力に心より感謝申し上げます。

「大学における障害学生支援」調査報告書を発行して

社会福祉委員会　**桑折美子**

本の表紙

ある年の国内奨学金贈呈式での社会福祉奨学生の受賞挨拶が胸に響いた。これに端を発して「身体に障害を持つ学生」が大学においてどのような支援環境下で学んでいるのかを詳しく知りたいとの思いから、社会福祉委員会は2018年に「大学における障害学生支援」調査を開始した。コロナウイルス感染症対策の影響で調査活動の中断を余儀なくされたが、今年の4月に「大学における障害学生支援」実態と課題について、報告書として纏めるに至った。

調査にあたっては、2016年4月の「障害者差別解消法」施行後初めての調査結果（調査実施2017年5月～2018年6月）と、その5年後の調査結果（同2022年6月～12月）が反映されている（一社）全国障害学生支援センター発行『大学案内2019障害者版』及び『大学案内2024障害者版』掲載のデータを活用した。調査対象とする障害の種類は、視覚障害、聴覚障害、肢体不自由、（一部内部）障害とし、「配慮・支援」項目は、受験体制、入学試験での配慮、キャンパス設備及び入学後の学生生活全般への支援を抽出した。また大学の公式ホームページの記載内容を精査して、各大学のウェブアクセシビリティ、ならびに障害別授業支援についての実態把握を並行して行った。

さらに「支援を提供する側」からの情報だけではなく「支援を受ける側」の声を直接聞くために、(1) 大学構内支援設備の見学会、交流会（2018年、2019年）、(2) 2013年度～2022年度社会福祉奨学生への「大学における支援実態」聞き取り調査、(3)（一社）全国障害学生支援センター代表理事と事務局長へのインタビュー の3点について実施した。

今回の調査を通して、障害を持つ学生が大学で学ぶ意義とともに、支援情報開示の重要性、喫緊の災害時対策、障害学生支援専門知識を持つ教職員の配置、大学間連携を含む関係機関との連携支援システム等、共生社会の実現に向けての数々の課題が浮き彫りになった。障害を理由に修学への配慮を必要とする学生は全体のごく少数ではあるが、「支援を提供する側」と「支援を受ける側」双方の対話に基づいた支援体制のさらなる推進が不可欠である。社会福祉委員会はこれからも後押しとなる活動を続けていきたい。

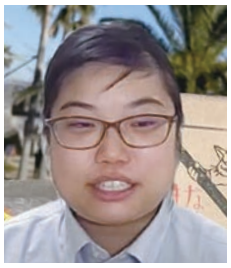
＊支援実態を広く知ってもらいたく、「大学における障害学生支援」調査報告書の全文をJAUWホームページに掲載しました。

＊本書をご希望の方は社会福祉委員会までご連絡下さい。

Jカフェ〈ゲスト編〉報告

ポストコロナの障害者就労とキャリア教育
－まなキキ・フォスタープランとオンライン社会科見学の実践から－

講師：2022年度国内奨学生　濱松若葉



講師ご自身の社会人経験や、日本の障害者就労の現場で実際に起きていることを見聞きされたことから始まる思い。その思いが、新型コロナウイルス感染症流行下というリスクをチャンスへと変え、障害などの事情がある子どもたちへの学び・さらに特別支援学校のキャリア教育との繋がりを通して、それぞれが循環する活動という形になり、広げられていることに感銘を受けました。そして、これを津田塾大学や大学院に通う学生さんたちが主体となって行われているということ、全てが画期的で本当にすばらしいことだと思いました。ここ20年の間だけを考えても、支援を必要とする通級クラスを利用する子どもさんの数は急速に増え続けています。新型コロナウイルス感染症流行下で生活様式が一変する中で、就労を含めて、ますます大きな社会問題になることが予測されます。

今後、マタニティや産前産後ケアの充実も急がれると思われますが、それと同時に、保育や教育、就労支援に関しても、多岐に渡っての意識の変革が日本全体で必要になると考えられます。津田塾大学の学生さんたちの取り組みは、今後の教育や就労への取組み、意識変革においても、モデルケースになるのではないかと感じました。

岡山支部　木林京子

Jカフェ第15回報告

ポストコロナ時代の国際教育
－今大学に何が求められているのか－

講師：富田敬子

9月9日のJカフェ第15回を岡山支部のパブリックビューイングで視聴しました。具体的なデータのその後を知りたくなり、実態を確認すると、再認あり、疑問がさらに湧いてきて大変でした。まず、いくつかの大学の留学生数ですが、COVID-19直後の2020年は前年度とほぼ同数。2021年以降はいくつかの大学で増加に転じていて予想外でした。ニュースで聞き妄信したと反省。出身地域別ではアジア諸国が圧倒的です。アフリカ諸国からの留学生も意外に多いです。経済界の近年のアフリカへの注目と重なります。大学内は既にグローバル化進行？大学それぞれの国際化の取り組みは、ユニークで、画一的でなく、独自色がでており、想像以上の変化に驚かされました。高校生を巻き込んだ取り組みも増えています。現場って大事と痛感しました。

時代の変化という点で「Z 世代」に注目しています。この世代は、真のデジタルネイティブ。特にスポーツ分野では、技の習得にYouTubeの活用など想像を超えた学びをします。国際試合も経験豊富、目標が明確、実行力があります。この世代が学ぶ環境は、与えられるのではなく、自らの積極的な関与が求められる場です。違う世代だからこそ、私は協働できる存在でありたいとの思いに至りました。

岡山支部　矢吹眞弓

スイスヨーデルの風コンサート

文化事業委員会　小合　忍

10月6日伊藤啓子、アムスレ･クヴァンテット、東京ようでる合唱団によるコンサートが、スイスよりアルプホルンの妖精リザ・シュテル、房子シンドラご夫妻をゲストに迎え、四谷区民ホールで盛大に開催され、JAUW は共催として支援しました。

スイスヨーデルとは、16世紀から17世紀のアルプス地方の牧場で働く人々や、そこに住む人々の間で歌われている民謡やその歌い方のことです。元々牧童が家畜を呼び寄せるためや、違う山で働く仲間と連絡を取るための手段として生まれ、今日まで進化してきました。アルプホルンは牧童の道具であり、これを吹くことで家畜を集めたり、移動させたりしていました。スイスヨーデルの特徴は胸に響かせる声と、高い裏声を素早く交替させるという発声の仕方にあり、旋律が上下に激しく動くように聞こえます。アルプホルンの太く柔らかな温かみのある音色と、スイスヨーデルの歌声は自然に人の輪が出来る、スイスが生んだ偉大な文化遺産の1つと感じました。

その一方で伝統楽器の若き名手達による他楽器とのアンサンブルという新たな試みに今のスイスの風が吹き、日本とスイスの音楽愛が深まった一日となりました。

ヒューマン・ストーリー　第8回　　JAUW 元会長　鷲見八重子

JAUW 会長を4年務められ、幅広くご活躍の鷲見元会長に来し方や展望を伺いました。

●どのような環境の中で歩んでこられたのでしょうか。

戦中から戦後数年暮らした浦和の家には、母の姉と妹の家族のほか祖父も二人いて、大人の言うことはまちまちなんだと学びました。

小学校は新宿区立の津久戸小学校（飯田橋）で、3年生の時でしたか昭和天皇皇后両陛下が視察に来られ、体育館で歓迎の寸劇をお見せしました。たった一言でしたが台詞を何度も猛練習し、母のコートを仕立て直した一張羅の服で舞台に立ったのは懐かしい思い出です。以来、舞台好きになり特にギリシャ悲劇とシェイクスピアは大好き。

中高は桜蔭学園です。どの教科も愉しくて、よく学び、よく遊びました。英語は津田塾卒の先生でしたが発音が美しく、英文法の論理的説明に魅せられました。クラブ活動でも「安寿と厨子王」などの英語演劇の脚本作りから学園祭での上演まで、充実した青春の日々でした。

1960年に津田塾大学に進み、入学式の粕谷よし学長の祝辞から‘all-round personality’が胸にストンと落ちました。ただ入学した年は安保闘争で社会全体が騒然としていて、好きな英語を存分に学びたい思いはくじかれ鬱々としていました。そんな折、東大の公開講座で無教会の前田護郎先生が普遍的な問い「人は何のために生きるか」について聖書をテキストに講義していらして放課後熱心に通いました。そして先生の経堂聖書会に入れていただきました。

●ご専門についての思いをお聞かせください。

大学では「George Eliot の倫理観」について卒論を書きました。長編8作を二年がかりで読破し、英米の小説の背景には厳然とキリスト教があり、歴史・社会・文化のゆるぎない基盤であることに圧倒された思いがあります。また、精神医学の神谷美恵子先生の演習「パスカルを読む」を履修できたことは、生涯の宝になったと思っています。

英文学研究については、1986年に『現代イギリスの女性作家』（勁草書房）を出版した際、10名の研究者と共同で1章ずつ担当するオムニバス形式の編集を試みたのですが、それが朝日新聞の「ライター登場」欄に採り上げられ、それを機に「現代女性作家研究会」を立ち上げ、イギリス女性作家紹介シリーズ10巻の編集・刊行に漕ぎつけました。

●JAUW に入会されたきっかけは。

2004年3月に突然、津田の先輩の今井けい21代会長から国内奨学委員長にとの要請があり、それからです。田中正子22代会長のもと副会長を務め、2010～2013年には再び奨学事業担当理事を務めました。

●国連第3委員会に出席されたきっかけは。

2012年に45年勤めた和洋女子大学を定年退職した途端、当時の阿部幸子会長と青木怜子国連 NGO 国内女性委員会委員長から推薦された結果です。晴天の霹靂で驚き慌てましたが、大変貴重な経験となりました。

●国連第3委員会に関係する活動をお聞かせください。

政府代表顧問は「国連の広報につとめる」との規定があります。さいわい種々の講演会に招かれJAUWの支部（岡山、長崎、仙台、京都、静岡）や、他団体（パシイワ、WILPF、ソロプチ仙台、神奈川女性校長会、国際女性の地位協会など）、また和洋女子大学、大妻女子大学等で国連の話をさせていただき、併せてこの10年間にいくつかの団体役員を務め、新しい分野に活動が広がりました。現在は国連 NGO 国内女性委員会の委員長を務めています。

●JAUW の会長として力を注がれたことや思い出深い出来事をお聞かせいただけますでしょうか。

JAUW創立70周年記念式典を行い、記念募金事業（目標1,000万円）を滞りなく終えたこと。

会員拡大ワークショップを仙台と福岡支部（大分･熊本･長崎合同）で行い会員増に繋がったこと。また秋田、栃木、茨城、札幌、函館、長野、奈良、大分の各支部を訪問し交流を深められたのは何よりうれしいことでした。

●これからの JAUW にどのようなことを期待されますか。

高等教育を受けた女性の団体として日本と国際社会の女性の高等教育推進に尽力したい。一人ではできないことでも、同じ志をもつ個々人の意思と知恵と行動力を結集してジェンダー平等を促進し、より良い社会の実現にリーダーシップを発揮できる女性団体でありたい。そして世代を超えて切磋琢磨し、ジェンダー格差、ジェネレーション格差のない、平和で豊かな社会を目指して協働する場でありたいと思います。

●今後の課題について

若い世代が力を発揮できる場を創り出すこと。全国に20支部以上ある一般社団法人の強みを活かし、本部と支部の連携を深めること。広報としては、スマホ中心になりつつある今、パソコンを使わない次世代向きの発信について考える必要があるのではないでしょうか。

―― プロフィール ――

和洋女子大学名誉教授。一般社団法人大学女性協会会長（2016～2019年度）、第67・68回国連総会第3委員会日本政府代表顧問、国連ウィメン日本協会理事、同東京会長、認定 NPO 法人チャイルドファンド･ジャパン理事、NPO法人今井館教友会理事等を歴任。現在、国連NGO国内女性委員会委員長、公益財団法人日本キリスト教婦人矯風会理事、公益財団法人登戸学寮顧問。

著書に『マーガレット･アトウッド』（共著、彩流社）、『イギリス女性作家の半世紀』（全5巻、編著、勁草書房）、『アンジェラ・カーター：ファンタジーの森』（共著、勁草書房）他。
訳書に『ヘンリー・ジェイムズ－批評的紹介』（八潮出版）、『女性自身の文学：ブロンテからレッシングまで』（共訳、みすず書房）他。

支部だより

仙台支部活動紹介

仙台支部長　相澤富美江

仙台支部は現在31名で活動しています。コロナ禍が落ち着き始めた昨年より対面の活動を再開いたしました。役員は11名で、月1回のペースで役員会を開いています。会場は街の中心部、緑の美しい定禅寺通りに面した商業施設内にある、仙台市男女共同参画推進センター、エル・パーク仙台です。2015年にこの会場で全国総会が開催されましたので、覚えている方もいらっしゃるのではと思います。

支部では、毎年、このセンターを管理･運営している（公財）せんだい男女共同参画財団に共催していただき、公開講演会を開催しています。今年は9月に、仙台支部の会員である吉川貴子会員を講師に迎え、「脳の性差が生まれる仕組み―神経発達障害の性差―」というタイトルで、脳の性差についてのご自身の研究や最新の知見、性差医療などについて、講演していただきました。

国内奨学生のお話を聞く機会も設けています。昨年の支部総会では、一昨年の国内奨学生の笠井美玖さんより、『航空宇宙研究の今日』というタイトルで研究を紹介して頂きました。女性研究者のお話を聞くたびに、その真摯な姿勢とパワフルさに感動し、この協会を通して応援できることをうれしく思います。支部の奨学事業としては、チャイルド･ファンド･ジャパン経由で、フィリピンの女子学生1名を支援しています。支部会員のお一人が、ファンドの前身である里親運動に参加していたことがきっかけで始まりました。

親睦活動としては、交流会、新年会を行っています。おいしい食事をいただきながら懇談し、親睦を深めています。その際に、会員のお一人にご自分のお話をしていただいたり、国内奨学生に研究を紹介していただいたりしています。今年の新年会では、一昨年、守田科学研究奨励賞を受賞された渡辺寛子会員より、「地球ニュートリノの観測」のお話をうかがいました。写真はその新年会の時のものです。

他に、学芸員の解説付きの美術館鑑賞会の開催、支部便り「けやき」の発行（年2回）などがあります。

仙台支部は大学女性協会創設の翌年に結成され、2017年に70周年を迎えました。あと4年で80周年です。先輩方が築いてこられた歴史を絶やさないよう活動してまいりたいと思います。

2022年度仙台支部新年会

大阪支部の活動

大阪支部長　片岡みか

大阪支部の主な活動は、国内奨学生事業です。支部で選考会を行い、本部で選ばれなかった方全員に図書カード1万円分を送ります。応募者中で、本部での選考に漏れ、支部会員が興味を持ち、詳しく内容を聞きたいと思った方に、2月3月の例会で講演をお願いしております。講演の際に謝礼と交通費をお渡ししております。以前は、年に数回、会員や会員の恩師等にお願いして、講演会を開いておりましたが、例会に出席する会員が減り、また、例会に使用している部屋にはネットワーク環境がないことから、講演会の開催も難しくなりました。

また、年に1度、親睦をかねて、見学会などもしておりましたが、こちらも参加者減少と、企画の難しさに加え、コロナ禍で、ここ数年は、実施できておりません。

大阪支部も、他支部同様、高齢化かつ新入会員がほとんど無く、また、支部長はじめ、役員も交代できず、支部存続が危ぶまれる状況でした。幸い、最近、例会に参加できるようになった会員が新しく支部長を引き受けてくれることになり、どうにか存続の見通しが立ちました。

来年度より、新支部長の元で、現在の活動を続け、さらに支部が発展することを願っております。

2018年11月2日研修会「神戸ハーバーランド」にて

＊ みなさまの支部で紹介をなさりたい先輩・同輩、あるいは歴史や活動などを、是非、広報委員会までお知らせください

正会員の皆さまへ 役員候補者推薦のお願い

役員選考委員長　田邉光子

2024年5月第13回定時会員総会の終結をもって、JAUWの理事会の現理事および監事の任期が満了になります。

役員選考委員会は「役員選考委員会に関する規程」に従い定款第5章第22条および第25条により、正会員の皆さまに次期2024・2025両年度の理事・監事候補者の推薦をお願いし、その選考結果を会長および理事会に報告することになっております。

つきましては、別便の参考資料をご参照いただき2024・2025年度（一社）大学女性協会役員候補者推薦用紙にご記入のうえ、返信用封筒で2023年12月15日（金）までにご返送くださいますようお願い申し上げます（当日消印有効）。

大学女性協会活動の根幹を担っていただく役員の、2年に一度の大切な改選です。多数の皆さまの熱意あるご推薦を心からお願い申し上げます。

(一社)大学女性協会80周年記念募金パトリシア寄付者ご芳名

期間：2023年7月1日～2023年10月31日
寄付者人数：7名、**寄付金額**：200,000円
上記期間中の寄付者ご芳名（敬称略・支部別五十音順）
（東京支部） 岩村道子、加納孝代、長谷川瑞穂、森川淳子、鷲崎千春　**（奈良支部）** 中道貞子
匿名1名
全体期間：2021年4月30日～2023年10月31日
寄付者延人数：235名、**寄付総額**：2,922,600円

寄付金の振込先口座
銀行：ゆうちょ銀行
名義：一般社団法人　大学女性協会
① 払込取扱票（郵便振替）で行う場合
口座記号及び口座番号：00130-0-587701
※パトリシア募金専用の払込取扱票をお持ちの場合は、そのまま使用可能です。
② 他行から振込の場合
支店名：〇一九店
口座種類及び口座番号：当座 587701
※ゆうちょ銀行口座から振り込まれる場合も同じです。

丸大食品 心に残る贈り物

【HA-502】

【KK-505】

≪丸大のギフトは、どなたにも喜ばれます≫
お歳暮・お中元時期のほか、記念品・新築祝・開店祝
御礼・内祝・快気祝・各種景品等ご利用下さい。

丸大食品株式会社　中央営業所特販係　　担当：棚橋
〒135－0051　東京都江東区枝川2－23－2
TEL03(3647)3270　　FAX03(3647)3274

JAUW 新春のつどい

2023年度新春のつどいは、昨年と同じ会場で下記のように開催いたします。

大勢の皆様のご参加をお待ちしております。

日　　時：2024年1月13日（土）11：00～15：00
場　　所：学士会館　201号室
千代田区神田錦町3-28　03-3292-5936
プログラム：2023年度国内奨学金贈呈式
懇親会
会　　費：10,000円の見込み
申 込 先：大学女性協会 本部事務所へファクスまたはメールで
申込締切：2023年12月15日
振込締切：2023年12月20日
振 込 先：三菱 UFJ 銀行四谷支店
普通預金：口座番号1077777
別口　一般社団法人大学女性協会　理事岩村道子

キャンセルは3日前までとさせていただきます。

＊当日収益事業委員会によるバザーを行います。

国際奨学委員会からの報告

～お二人の奨学生を迎えます～

国際奨学委員長　加納孝代

コロナ感染症勃発から丸3年のブランクを経て、大学女性協会ではこの秋日本に留学予定の女性研究者2名を支援することになりました。南米コロンビアからのシルヴァーナさんは京都大学防災研究所で、北アフリカのモロッコからのハナネさんは広島大学の先進理工系科学研究科（院）で、来年3月まで勉学の予定です。来日されたらご紹介いたしますが、とくに京都支部と広島支部の会員の皆様、なにとぞよろしくお願い申し上げます。

理事会から

- 丸大ハムのカタログを同封します。ご協力をお願いします。
- 9月13日、GWI 本部理事とのオンライン対話集会に、日本から10名弱が参加しました。外部資金を導入して公益事業を行い、知名度を上げる必要が説かれました。
- 全国セミナー1日目参加者は会場65名、Zoom 22名。2日目はそれぞれ34名、19名でした。会員に加え一般及び学生の参加もあり、会場は満杯。恒例のバザーもありました。
- 11月理事会で、国内奨学生として一般奨学生6名、安井医学奨学生1名、社会福祉奨学生3名が、そしてCSW68への派遣支援学生2名が承認されました。

＊事務所の冬休み：2023/12/27（水）～2024/1/5（金）

新入会員　理事会承認　2023年7月～10月

仙台支部　長谷　和子　　東京支部　桑野　啓子　　東京支部　笹澤有紀子
京都支部　柿原　文子　　神戸支部　遠藤　知子　　神戸支部　川村　万理
神戸支部　但本　伸子　　神戸支部　古田　啓子　　福岡支部　萩尾　紀子
福岡支部　眞子由佳里　　福岡支部　松丸ヒロ子

一般社団法人　大学女性協会
〒160－0017　東京都新宿区左門町11番地6 パトリシア信濃町テラス101
電　話　03－3358－2882　　ＦＡＸ　03－3358－2889
https://www.jauw.org　　E-mail：jauw@jauw.org
発行人　岩村　道子　　編集責任者　端本　和子
発行日　2023年11月28日